



聖霊降臨の主日 (ヨハネ 20:19-23)

「聖霊来てください」と祈る

聖霊降臨の主日を迎えました。今日を終えると教会の季節も「年間」の季節に変わっていきます。本日、ミサの派遣の祝福には、「アレルヤ」を加えて、「行きましょう。主の平和のうちに。アレルヤ」「神に感謝。アレルヤ」と答えてミサを終わります。

聖霊の賜物を受けて、今年の典礼暦年に信仰の証ができるように、願わくは信仰を同じくする兄弟姉妹が与えられるように、福音の学びを得たいと思います。朗読では、復活したイエスが弟子たちに現れ、「平和があるように」と声をかけた点と、派遣にあたり「聖霊を受けなさい」と仰って、「罪のゆるし」について強調している点が目立っています。

先に、イエスと生活を共にしている間、弟子たちがどんな場面で「平和」「罪のゆるし」を教えられ、体験したのか確かめましょう。「平和」については、弟子たちを宣教に派遣する場面が思い出されます。「実習体験」といったところでしょうか。マタイ福音書の「弟子たちの派遣」、ルカ福音書の「七二人の派遣」ですが、マタイ福音書を取り上げます。

「その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。」(マタイ 10・12-13)

実習体験ですから、弟子たちは派遣して下さったイエスへの信頼の上に立って「平和があるように」と願います。弟子たちが平和の源なのではなく、遣わして下さったイエスが平和の源です。常に師であるイエスが後ろ盾になってくださることを感じながら、弟子たちは「平和」を願い続けることができました。

聖霊降臨の主日の福音朗読でも、イエスは「あなたがたに平和があるように」と声をかけます。すでにイエスは十字架上の死を経て、復活して声をかけておられます。ここでの「あなたがたに平和があるように」との宣言は、最初に宣教実習に派遣されたときとは違って聞こえたでしょう。このたびの「平和」の源はどこにあるのでしょうか。

もちろん、かつてと変わらず「イエス・キリスト」が平和の源なのですが、私はその保証として、聖霊が与えられた、聖霊降臨の出来事があったと考えました。弟子たちがこれから宣教に出かけていく所は、必ずしも友好的な場所ばかりではありません。イエスの復活を証言することで、対立や分裂を生じるかも知れません。かつての、いわば実習の時とは違います。そこで自分たちが「平和の使者」であることを保証してくれるのが聖霊なのです。

もう一つの、「罪のゆるし」を強調している点も考えてみましょう。弟子たちと宣教生活に出かけたイエスは、どんな場面で、「罪のゆるし」を宣言なさったのでしょうか。ルカ福音書第7章で、罪深い女として登場する女性に、「あなたの罪は赦された」と仰っています(ルカ 7・48)

参照)。もっと特徴的なのはマタイ、マルコ、ルカ福音書で共通に取り上げられている「中風の人をいやす」場面です。「あなたの罪は赦される」または「あなたの罪は赦された」と仰って、中風の人本人と、周囲の人を驚かせたのです。

居合わせた弟子たちも、きっと驚いたことでしょう。だれもできない宣言を、大勢の人の前でおこなったからです。神お一人のほかに、罪を赦すことはできないのに、そのことばを目の前で聞いたわけです。そして今、復活したイエスは弟子たちに息を吹きかけて言われました。

「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(ヨハネ 20・22-23) 聖霊が、これから出かけていって神のわざを取り扱う弟子たちの保証、後ろ盾になってくださるのです。

聖霊が降臨する。聖霊が与えられる。使徒言行録の記事を読んでいると、何だか特殊撮影とか、アニメでなければ実現できないような光景が描かれています。けれどもその中心にあるのは、「復活したイエスが、いつも弟子たちと共にいてくださる保証として、聖霊が与えられる」ということであり、そのことをドラマチックに描いているのです。

ちょっと横道に逸れるかも知れませんが、使徒言行録のドラマチックな描き方を何かと比べてみましょう。たとえばそれは、結婚している夫婦のプロポーズの思い出です。海辺の公園で、燃えるような夕日が沈む直前、夕日を背にして「結婚してください」と言った。ロマンチックな場面を用意してくれたことに感激して「プロポーズをお受けします」と言った。たとえるならこういうことです。

実際には燃えるような夕日ではなかったかも知れませんが、プロポーズの経験の無い私でさえも、これくらいの描き方はできるし、大切な出来事を記憶にとどめるために、これくらいの描写はすると思います。こういう描き方が事実と反するとか大げさであるとか、私はまったく思いません。こういう描き方は有りだと思います。

とにかく、「共にいてくださる復活の主」を聖霊が理解させてくれる。そのことを記憶にとどめるために、使徒言行録のような描き方をしたと思いますし、ヨハネ福音書のように、イエスと行動を共にしたことと、聖霊を受けることとを結びつけて説明したりしているのです。

私たちに当てはめましょう。私たちに、聖霊が与えられます。聖霊は、事あるごとに「復活した主が、共にいてくださる」と実感させてくれるお方です。道を見失ったとき、成功の陰で自分を見失ったとき、誰が本当に頼れる人なのかまったく分からなくなったとき、いろんなときに聖霊が見分ける力を与えてくださり、「自分で言うのも何だけど、イエス様っているんだなあ」と感じさせてくれるのです。

意外と身近な所で、聖霊を受けている体験に巡り会います。気づかないことが多いかも知れませんが、だからこそ、私たちは機会あるごとに祈るのです。「聖霊来てください。」意識的に、このように祈ることにしましょう。